

『マイケル・K』における身体と語りの構造

西 あゆみ

はじめに

本発表は、J.M. クッツェー (J. M. Coetzee) の『マイケル・K』 (*Life & Times of Michael K*) を読解し、知的障害を持つとされる登場人物を複雑な語りの形式で書くことの意味について考察した。ポストコロニアル文学研究者のベニータ・パリー (Benita Parry) は“Speech and Silence in J. M. Coetzee’s works”において、クッツェー作品における沈黙と発話の関係について分析している。パリーは、クッツェー作品において、抑圧され、周縁化された他者がしばしば沈黙していることに着目し、彼らにとっての政治的な抵抗が、沈黙を通じて神秘的・非言語的な意味システムを担うことに限定されていると批判している。また、抑圧された他者が沈黙することによって、他者を沈黙させる抑圧の諸条件を批判する力が弱まっていると指摘している。しかしながら、『マイケル・K』に関しては、K が沈黙することの意味は、より複雑であると考えられる。K の沈黙は、実際には、対人関係においてのみ現れており、そのような場面で求められる簡明な説明ができないときに沈黙しているからである。本発表は、『マイケル・K』という作品の語りの形式は、K が社会のなかで障害者として構築される様子を批判的に描こうとしていると同時に、「障害」を持つ身体固有の経験を描くことを可能にしていると論じる。

『マイケル・K』における語りの構造の特徴

『マイケル・K』は、あえてKの「知的能力」の判断を曖昧にする語りを採用しているかに思える。異なる視点や意識が独立したセンテンスで現れることもあるが、一つの文の中に、異なる語り手の意識が混在することもあるため、誰の判断を信頼することが正しいのか明確ではないからだ。

三人称の語りのなかでも、Kの意識を代弁するのではない地の文では、Kが知的障害を持つことは疑問の余地のないことであるかのように説明することがある。例えば、以下の三人称の地の文では、Kが施設に入所することになった理由を、彼の口唇裂と知的能力の低さに原因があると並列で語っている。“Because of his disfigurement and because his mind was not quick, Michael was taken out of school after a short trial and committed to the protection of Huis Norenus in Faure...” (4). これは小説の冒頭部分であり、読者は早い段階でこの三人称の判断を通してKを捉えることになる。

ここで、Kが自らの特質を理解する様子を一人称の独白から考察したい。次の引用は、Kが隠れて生活するカルーの農場に農場主の孫だという男が現れたときのKの反応である。“He thinks I am an idiot who sleeps on the floor like an animal and lives on birds and lizards and does not know there is such a thing as money” (62). この独白においてKは、知的能力が低いと見られることに苛立ちを覚えている。実際、Kが一人称で語るときには、(he thought、と三人称の語り手の意識が入ってくるとは言え) 自己反省的であり、比喩を使って豊かに表現する。例えば、次の引用では、ゲリラについていく自分を「ブラスバンドを追いかける子供」のようだと想像している。“When they leave in the morning, he thought to himself, I could come out of hiding and trot along behind them like a child following a brass band” (109). このように、一人称の独白では、知的障害者として扱われることに反論し、豊かな表現を用いて自分の考えを述べるため、三人称の語りや作中の第三者によるKの知的能力の判断との間にギャップが生まれている。

三人称でKの意識が語られるときには、一文のなかに複数の意識の存在が感じられたり、Kの意識に焦点があっても、その意識の持ち主が本当にKなのかが不確実であることが多い。例えば、以下の引用は『マイケル・K』の語りの特徴を論じる際にしばしば取り上げられる。“He wondered whether by now, with his filthy clothes and his air of gaunt exhaustion, he would not be passed over as a mere footloose vagrant from the depth of the country, too benighted to know that one needed papers to be on the road, too sunk in apathy to be of harm” (39). デレク・アトリッジ (Derek Attridge) やキャロル・クラークソン (Carrol Clarkson) も指摘するように、この引用では、“He wondered”と、Kの意識であることを冒頭で述べながら、第三者の視点によってでしかなされないであろう客観的な外見や雰囲気についての文語的な記述がその直後に続いている。文語的な表現で語られるKの意識は、Kが対人的には最低限の言葉しか発せず、独白では口語的表現を用いるのと対照的である。このような、Kの意識であるかどうかについて曖昧さを残した語りは、Kを知的障害者だとカテゴリー化しようとする第三者の試みを拒む効果がある。

リハビリテーション・キャンプにKが収容される第二部では、キャンプで勤務する医師が、質問に満足のい

く答えをせず沈黙する K を知的障害者であると断定する。そして、K の沈黙に意味を与え、神秘化しようとする。例えば、次の引用では、動物に K を例えることで、K の異質さを強調している。“[P]eople like Michaels are in touch with things you and I don’t understand. They hear the call of the great good master and they obey. Haven’t you heard of elephants?” (155) そして、一方通行のコミュニケーションのなかで、最終的には推測し解釈するしかない存在の K について、医師は、K の滞在は寓意だったのだ、と納得しようとする。“Your stay in the camp was merely an allegory, if you know that word. It was an allegory—speaking at the highest level—of how scandalously, how outrageously a meaning can take up residence in a system without becoming a term in it” (166). ここでは、管理システムから逃げ続けるという状況のメタファーとして、K の身体が解釈されることになる。

「障害」を持つ身体

ここまで、K が「知的障害者」として、社会的に構築されたり、何らかのメタファーとしての意味づけをされるさまを見てきた。それと同時に、沈黙を含めた K の特質が、社会的に否定的な価値付けをされ、障害として経験されるプロセスもこの作品は描いている。例えば、一人称の独白では豊かな言語感覚を見せ、考えをはっきり述べる K だが、言葉でコミュニケーションを取りたい場面では、話すことができず、やむを得ず沈黙することがある。次の引用では、食べ物を分けてくれた家族にお礼が必要とされることが分かっているが、言葉が出てこない。“At the table the urge again came over him to speak. He gripped the edge of the table and sat stiffly upright. His heart was full, he wanted to utter his thanks, but finally the right words would not come. The children stared at him; a silence fell; their parents looked away” (48). この場面では、懸命に喋ろうとしても言葉が出ない K から周りの人が目をそらすところまで描かれており、K が周囲の期待を裏切ったことに痛みを感じているだろうことが伝わる。ここでの K は、自分の発音や発話が社会では理解されづらいものであることを知っており、正しいとされる発音や話し方でないと理解しようとしないう、健全者主義の環境に生きるプレッシャーから言葉がでてこないとも考えられる。また、第三部では、障害を持つとされる身体だからこそ起きたであろう経験が描かれる。ケープタウンに戻った K が路上であるホームレスらしき集団と近づくことになる。そして、その一員の女性から性的な行為を受ける。K の同意の有無はこの性行為に関して問題とならず、さらに K はこの女性に対する性的欲求を持っていたわけでもない。性行為が終わった後も、K はなかなかその記憶を取り払うことができず、行為を苦々しく思い返す。“I have become an object of charity, he thought. Everywhere I go there are people waiting to exercise their forms of charity on me. All these years, and still I carry the look of an orphan. They treat me like the children of Jakkalsdrif, whom they were prepared to feed because they were still too young to be guilty of anything” (181). ここで K が一人称で語るように、女性が K と性行為を持ったのは、K を持たざる者だと判断したからであり、対等な関係の中で双方が欲望した結果ではない。また、身体・知的障害者に対する性暴力が起きる確率が高いことを考えると、「障害」のある身体を持つからこそ起きた出来事だともいえる。第二部の医師が、K を解釈し、意味づけようと試みるのに対して、第三部では、望まない性行為という K の身体性に関わる出来事と、それについての K の一人称の考察を対置させている。この展開から、K が外部から解釈されるのを拒み、固有の身体経験を持つ人物として自らを再定義しようとしているのだと考えることができる。

結び

『マイケル・K』においては、抑圧された人々の神秘的な抵抗の手段として沈黙が機能しているのではなく、K の特性を社会が障害として構築するさまを描く試みとして、沈黙を含めたハイブリッドな語りが使われているのだと考えられる。また同時にこの作品は、社会から要求される能力観に合致しないゆえに自らの特質に否定的にならざるを得ない状況や、障害とみなされる身体を持つことによって起こる経験を描き出し、その経験に関する K の内省を含めることで、K の身体をメタファーとしてのみ解釈しようとすることを拒んでいる。

引用文献

Attridge, Derek. *J. M. Coetzee and the Ethics of Reading: Literature in the Event*. U of Chicago P, 2004.

Clarkson, Carrol. *J. M. Coetzee: Countervoices*. Palgrave Macmillan, 2009.

Coetzee, J. M. *Life & Times of Michael K*. Penguin, 1983.

Parry, Benita. “Speech and Silence in the Fictions of J.M.Coetzee.” *Writing South Africa: Literature, Apartheid, and Democracy, 1970–1995*, edited by Derek Attridge and Rosemary Jolly, Cambridge UP, 1998.

J.M.クッツェー. くぼたのぞみ訳. 『マイケル・K』. 岩波出版, 岩波文庫, 2015 年.